生徒指導お助けリーフ　Ｎｏ．２

“学校全体で”を意識した生徒指導を展開しよう

問題行動が多様化、複雑化する中で、教師が一人で問題を抱え込み、対応に苦慮しているような状況は好ましくありません。生徒指導が効果的に機能するためには、“学校全体で”を意識して指導に当たる教師の姿勢が大切です。「学校はチーム」の意識をもち、チームで対応する生徒指導体制を確立しましょう。

チームで取り組む生徒指導の３つのキーワード

チームで見る

子どもの小さなサインを見逃さないために、日頃から子どもの言葉、行動、表情等、観察のポイントをすべての教職員で共有することが基本となります。教職員が一つのチームとして、それぞれの目線でとらえた情報を共有することで、子どもたちをより多面的に深く理解することができます。

チームで関わる

子どもたちの問題行動に迅速かつ適切に対応するためには、チームとして対応のねらい、方法を明確にし、同じ意識をもって取り組むことが大切です。教職員一人一人がチームの一員としての自覚をもち、研修に取り組んだり、必要に応じてＳＣ※1やＳＳＷ※2をチームに加え、子どもに関わっていくことが問題行動の早期解消につながります。

チームでつなぐ

子ども同士はもとより、親や教師をはじめとする身近な大人など、人との関わりを通して子どもたちは成長します。

教職員がそれぞれの立場から子ども同士、子どもと周りの大人たちを意図的につなぐことは、子どもたちの自己有用感を高め、問題行動の未然防止につながります。

※１　ＳＣ→スクールカウンセラー
※２　ＳＳＷ→スクールソーシャルワーカー

整える

すべての教職員が「学校全体で」を意識し、チームで生徒指導に取り組むことは、学校のもつ生徒指導力を向上させるだけでなく、問題が発生しにくい学校風土、深刻化する前に解消できる学校体制を構築します。

チームで見る

実践例１　子どもを多面的にとらえる力を磨く
～子どもの状況把握について教職員全員で考える～

子どもの状況を的確に把握するための方法や大切なポイントについて、全教職員で確認、検討を行っています。

①生活日記や観察等、複数の方法で日常的にとらえることの重要性を確認する。

②定期・不定期それぞれのアンケートのねらいを明確にした上で、項目や時期、方法等を見直すとともに、実施する際の留意点を確認する。

③年間行事計画を踏まえ、対象（児童生徒、保護者等）と実施時期を検討する。

このことを通して経験の浅い教員が子どもの実態把握の在り方を理解し、多面的に子ども理解に努めようとする姿が見られるようになってきています。

「子どもを目の前にした常日頃の観察が重要であることや、アンケートのねらいやその意義が改めてわかりました。アンケート結果から見えてくることを他の先生と語り合うことも勉強になっています。」

チームで関わる

実践例２　子どもへの関わり方を学び合う
～教師の「書き言葉（評語）」で子どもの心を動かす～

子どもとの信頼関係を深めることをねらいとして、作品やノートに書く教師の言葉（評語）に着目した研究を行っています。「伸びしろコメント」と名付けて、子ども一人一人の心に届くコメントを書くための技術を学び合っています。教師の願いを込めたコメントにより、教師に話しかけてくる子どもが増えてきています。

「先輩の先生方のコメントを読ませていただくと、自分に足らなかった姿勢や言葉を見つけることができます。また、行事での子どもの見方や励まし方を学ぶことができました。」

実践例３　共通理解を図り、教職員が同じ方針で指導する
～ＳＣ、ＳＳＷ等の専門家を活用する～

校内のケース会議にＳＣやＳＳＷに参加してもらい、専門的な立場からの助言を得ています。そのことにより、学年職員が子どもや保護者への具体的な対応について、見通しをもって取り組むことができています。子どもたちも学年の多くの先生に見守られているという安心感をもてています。

「ＳＳＷが、学年会で気にかけていた子の様子や家庭の状況を分かりやすく説明してくださったので、学年全体でその子のことを温かく見てもらえるようになりました。担任である自分と学年の先生との役割分担ができ、気持ちが楽になりました。」

チームでつなぐ

実践例４　子どもの自発的な思いを学校全体に広げる
～生徒会によるいじめ防止の取組～

子どもたちの「いじめのない学校をつくりたい」という思いを全校生徒に広げるため、「何がいじめになるのか」といったアンケートや議論等を通して、生徒同士が「いじめ」と真剣に向き合う機会をもっています。

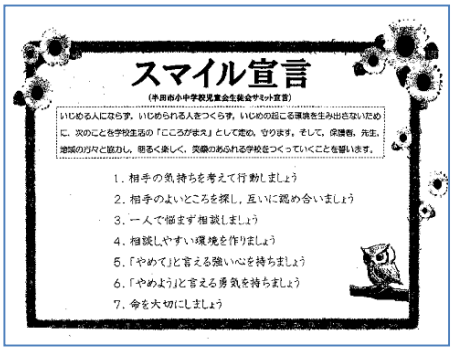
「子どもの思いを取組につなげる」「子どもの力を信じて任せる」ことを合い言葉に、励ましや活動を認める言葉がけを全教職員で行い、子どもたちの取組を支援しています。子ども同士が関わり合い、お互いの思いが形になっていく中で、いじめの問題を今まで以上に自分たち自身の問題としてとらえるようになってきています。

「担任だけでなく、多くの先生からも声をかけてもらう機会が増えたことによって、子どもたちの“自分たちの力でよりよい学校をつくる”という意欲が高まり、具体的な行動につながっています。」

“児童会・生徒会によるいじめ防止の取組をさらに広げる”

この地域では、それぞれの学校での取組をもとにして、市内の全小中学校の児童会・生徒会役員が集まり、「いじめのない学校作り」について話し合いました。

その中で、子どもたちの考えをまとめた「スマイル宣言」をつくり、自分たちの思いを大人たちに向けて発信しました。


スマイル宣言

（半田市小中学校児童会生徒会サミット宣言）

いじめる人にならず，いじめられる人をつくらず，いじめの起こる環境を生み出さないために，次のことを学校生活の「こころがまえ」として定め，守ります。そして，保護者，先生，地域の方々と協力し，明るく楽しく，笑顔のあふれる学校をつくっていくことを誓います。

1．相手の気持ちを考えて行動しましょう
2．相手のよいところを探し，互いに認め合いましょう
3．一人で悩まず相談しましょう
4．相談しやすい環境を作りましょう
5．「やめて」と言える強い心を持ちましょう
6．「やめよう」と言える勇気を持ちましょう
7．命を大切にしましょう

実践例５　子どもと親、中学生と小学生をつなげる
～いじめ問題をテーマにした親子読書と出前授業～

「いじめの問題について共に考える」をテーマに、親子読書を行いました。親子読書を通じて、生徒たちは我が子のことを真剣に考える親の思いに触れ、「一人一人がかけがえのない存在であること」、「人を傷つけるいじめは絶対にいけないこと」という思いを強くしました。そして、生徒たちはこの思いを来年度後輩となる小学生にも伝えたいと考えました。生徒の思いを受け止めた教師は、小学校に働きかけ、中学生による道徳の出前授業を実現しました。

「親子でいじめについて考える貴重な機会となり、改めて子どもをしっかりと見つめる親の責任を感じたという保護者の声が聞かれました。子どもの成長を学校と家庭で支え合う雰囲気ができました。」

「小学生は、出前授業での関わりの中で、来年先輩となる中学生の優しい姿に接し、心配していた先輩との関係の不安が払拭され、安心感をもったようです。」

振り返ってみましょう

チームを円滑に機能させるためのチェックリスト

職員全員がチームとして機能するためには、一人一人の教職員の意識がとても大切になってきます。誰か一人の意識が欠けていてもチームとしての機能が大きく妨げられます。チームとして機能するために大切な視点をまとめました。

1　チームの雰囲気、信頼関係を高めるために

□　校内で明るい表情で過ごすよう努めていますか。

□　同僚に自ら進んであいさつをしていますか。

□　「ありがとう」「助かりました」の言葉をよく使っていますか。

□　「ごめんなさい」「間違っていました」が素直に言えていますか。

□　気になる子どもの情報共有を日常の会話の中で行えていますか。

2　チームで支援していくために

□　学年や学校全体の子どもを見るという意識をもっていますか。

□　子どものちょっとした変化など、良い面の情報も共有していますか。

□　生徒指導部会等、会議で検討された内容を確実に伝えようと努めていますか。

□　適応指導教室に通っている子どもなどへの対応について、関係機関や一部の教職員に丸投げにせず、積極的にかかわろうとしていますか。

□　子どもの可能性、良さを認めるプラス思考の発言をしていますか。